

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	えすく笠松（児童発達支援）		
○保護者評価実施期間	令和8年2月10日		～ 令和8年2月28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 5
○従業者評価実施期間	令和8年2月10日		～ 令和8年2月28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 5
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年3月15日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	デジタルツールを活用し、子ども一人ひとりの発達段階に応じた支援を行えることが事業所の強みである。デジリハ・ロジカルkids LABO・スープリュームビジョンを通して、楽しみながら認知面や注意力、考える力、身体の使い方を育める環境を整えている。	子ども一人ひとりの発達段階や興味、得意・不得意に応じて課題内容や関わり方を工夫し、楽しみながら無理なく取り組めるようにしている。また、成功体験を積み重ねられるよう、活動の難易度や提示方法を調整している。	デジタルツールの活用方法や支援の視点を職員間で共有しながら、子ども一人ひとりにより適した課題設定や関わりにつなげていく。また、活動の様子や反応を振り返り、より発達に応じた支援内容の充実を図っていく。
2	活動プログラムが固定化しないよう工夫し、運動、制作、食育、デジタルツールの活用など多様な体験を通して、子ども一人ひとりの興味や発達を促している。	子どもの発達段階や興味、その日の様子に応じて活動内容を調整し、安心して楽しく参加できるよう工夫している。また、さまざまな体験の中で、できた喜びや意欲につながるよう関わりを意識している。	子ども一人ひとりの発達や興味に応じた活動内容をさらに充実させるため、職員間で支援の工夫や子どもの様子を共有しながら、より幅広い体験につなげていく。
3	活動内容や子どもの状況に応じてカーテンで空間を仕切ることができ、落ち着いて過ごせる環境や体を十分に動かせる環境を設定できることが事業所の強みである。また、天井の高い空間を生かした活動を行えることも特徴である。	子どもの発達段階やその日の様子に応じて空間の使い方を工夫し、安心して活動に参加できるよう環境を整えている。また、空間の特徴を生かしながら、安全面に配慮して活動内容を設定している。	子どもの状況や活動内容に応じた空間設定をさらに工夫し、より安心して過ごせる環境づくりにつなげていく。また、空間の特徴を生かした活動内容の充実を図りながら、安全に配慮した支援を進めていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	ワンフロア構造のため、子どもが落ち着いて過ごせる個別空間を確保しにくい点が課題である。特に未就学児には安心感や安全面への配慮がより必要であるが、別室対応には職員配置の調整が必要となる。	建物の構造上、静かに過ごせる個別空間に限りがあることに加え、未就学児は不安や気持ちの高ぶりに対して丁寧な見守りや安全面への配慮が必要であるため、別室対応の際には職員配置の調整が必要となることが要因である。	空間の使い方や職員間の役割分担を工夫し、できる限り安心して落ち着ける環境を確保できるよう対応していく。また、子どもの様子の変化を早めに捉え、個別対応が必要になる前の声かけや環境調整を意識しながら、安全に配慮した支援につなげていく。
2	避難訓練の実施状況や内容について、未就学児の発達段階に応じた対応も含め、関係者が共通理解を持てるよう情報共有を充実させるとともに、参加状況の把握や報告、振り返りを通して改善につなげる体制づくりが必要である。	避難訓練の実施前後における周知や報告の方法が十分に統一されていないことに加え、未就学児は年齢や発達段階によって避難時の対応が異なるため、訓練内容や参加状況を関係者全体で共有しにくいことが要因である。	避難訓練実施前の周知と実施後の報告を丁寧に行い、未就学児の特性や対応方法も含めて関係者間で共有を進めていく。また、参加状況や訓練時の様子を振り返りながら、子どもの発達段階に応じたより安全な避難対応につなげていく。
3	HUG内の記録や送迎時のやり取りを通して日々の様子は共有しているものの、保護者が療育の様子や支援内容に直接触れる機会が少なく、子どもの育ちや事業所での取組への理解を深める場が十分とはいえない。	日々の様子は記録等で共有しているが、保護者が実際の療育場面や子どもの活動の様子を直接見る機会が少なく、支援内容や成長の過程を具体的に共有する場が限られているためである。	活動見学や保護者参加の機会を工夫し、療育の内容や子どもの様子を直接共有できる場づくりにつなげていく。また、保護者との意見交換の機会も大切にしなが、相互理解や連携の充実を図っていく。